



初めて国際保健のフィールドへ

国立国際医療研究センター 国際医療協力局

人材開発部 研修課 萩原 悠

国際保健の世界へ

国際保健を志される方の中には、主な対象である低所得国や低～高中所得国¹に、ボランティアやスタディツアー、バックパッカーなどで行かれたことがある方も多いのではないのでしょうか。そんな経験が一切ない私が、国際保健のフィールドに入り、初めて低中所得国に行った時のことをお話ししたいと思います。

現在、所属している国際医療協力局を知ったのは、就職活動をしている時でした。将来、国際保健のフィールドで働きたいと思っていましたが、大学新卒では応募資格をほとんど満たしていませんでした。しかし、同じ国立国際医療研究センターの病院から看護師を配置していることを知り、まずは同病院で外国人患者や国際感染症などについての看護の経験を積もうと思い、就職しました。感染症病棟で7年間勤務後、国際医療協力局への異動がかないました。

そして、初めて訪れることになった低中所得国がラオスです。ベトナム、中国、カンボジア、タイ、ミャンマー、中国に囲まれたASEAN唯一の内陸国で、面積は日本の本州とほぼ同じですが、そのほとんどが山岳地帯です。年中夏服で過ごすことができ、街中では多くの女性が「シン」と呼ばれる伝統服の巻きスカートを着用しています。

初めての海外出張でしたが…

今回の出張の目的は、「ラオス人民民主共和国の一般人口における日本脳炎ウイルス・新型コロナウイルスに対する抗体保有決推定のための研究」でした。私にとって、出張は現地に行ってから仕事を始めるイメージでしたが、実際は事前に大部分の準備を済ませる必要がありました。出張は5月でしたが、私が入職した4月以前から、現地のカウンターパートとのメールやオンライン会議を通じ、詳細な計画策定や物品手配などの準備も進められており、万全の体制で渡航しました。

ラオスに到着後は、カウンターパートであるラオス保健省と協働で、首都ビエンチャンの現地調査員や協力員に対して、研究の調査方法に関する予備研修を行いました。初めての低中所得国への初めての海外出張で、とても緊張していましたが、カウンターパートやNCGMのラオス拠点で働かれている方々と顔を合わせて打ち合わせを重ねるうちに、ラオスの人々の温厚で誠実な人柄を身に染みて感じました。とても暑い時期でしたが、美味しいラオスフードやフレッシュなトロピカルフルーツジュースなどにも出会うことができました。

滞在4日目。この日は、質問票調査や採血、輸送、血清の分注など調査の一連の流れを模擬調査として実施する予定でした。ところが、早朝、悪寒で

¹ 低中所得国：世界銀行グループが分類している4つの所得グループ（低所得国・低中所得国・高中所得国・高所得国）の中の一つです。分類は、前年度の1人当たりの国民総所得に基づいており、低所得国は1,135ドル以下（約16.27万円以下）、低中所得国は1,136ドル～4,465ドル（約16.28万円以下約64万）以下とされています。

目覚めると発熱していたため、残念ながら残り3日の滞在期間はホテルで療養することになりました。幸いにも、共に行動していた他の研究協力者やカウンターパートの方々に体調不良者はいらっしやらず、模擬調査を無事終了することができたと聞いてほっとしました。

その後、9月の本研修、本調査に向けて採血用のラベルを準備したり、質問票を改訂したりと、研究責任者や研究参加者の方々と様々な準備を進めていきました。

今回の経験から得たこと

各々の研修や模擬調査中、カウンターパートや現地調査員からの率直なフィードバックや提案が特に印象に残っています。例えば、予備研修で研究協力者の1人が、村人を無作為に選定する方法について説明した時です。以前、国際医療協力局で行ったことのある木製の棒や封筒を使ったくじ引きのような方法を説明したところ、カウンターパートより「別の調査ではランダムに数字を選べるアプリを使って行った」という意見がありました。アプリでの選定は、物品紛失のリスクが低く、手順も簡単です。何よりも現地調査員が使用した経験があったことから、採用することになりました。

また、調査対象者を識別するために採血管に貼付したQRコードや対象者番号などを記載したシールについて、「QRコードは貼ってからだと読み込めないで、読み込んでから貼った方がいい」という指摘がありました。日本では採血管に貼付されたバーコードを読み込むシステムを導入している病院があるため、QRコードは貼ると読み込めないという認識が欠けていたのです。

渡航前、想定外のことが起きることもあると聞いていました。その言葉通り、倫理審査の影響で渡航が延期になったり、研修の物品が車に入りきれなかったり、と想像もしていなかった出来事が相次ぎました。そういった時でも、即座にカウンターパートの方々と日本の研究協力者と話し合い、打開策を見出しながら、計画を進めていく先輩局員の姿を間近で見ることができ、とても実りある経験になりました。それと同時に、国際協力は個々人の発想力や調整力はもちろんですが、何と言っても現地の方々と信頼関係を築き、みんなが一つの方向を向くことで、成し遂げられていると強く感じました。

出張前は、「コミュニケーションをうまくとれるのだろうか」、「安全面は大丈夫なのか」といった不安もありましたが、杞憂に過ぎませんでした。カウンターパートと協働し、工夫しながら、人々の保



研修の途中、息抜きにラオス式の体操をしている様子



お昼休憩に食事を囲む様子

健、衛生の向上を目指すことのやりがいを実感するとともに、ラオスの自然や文化、国民の穏やかな人柄にも触れることができ、国際保健の世界に飛び込んで本当によかったと思っています。

今回、初めて国際保健の現場を経験できたこと

で、目指していたことが具体的に見えてきました。このような機会を与えていただき、ありがとうございました。この場をお借りし、改めて感謝申し上げます。